



# 脱原発社会の実現と 生きるための医療機関を

清野 和彦 (元福島県教職員組合委員長)

「外部被ばく」「内部被ばく」と問題にされていますが、東京電力福島第一原発事故から福島県内にいた、居住している限りは、放射能の影響を合わせて一体的に受けているのです。

明らかにされているのは、大人よりも子どもたちの方が、放射能から受ける力は大人の数十倍も大きいということです。そして、後々になって被害が現れるのです。5年たってから、20年たってから、あるいは50年たってから被ばくが原因でガンになってしまった人が出てくることをヒロシマやナガサキ、チェルノブイリは教えてくれました。

アメリカによってヒロシマに原爆が投下されてから25年が

過ぎた1970年代に入って、広島で被爆二世が相次いで白血病で亡くなりました。これに対して、当時の自民党政府は「被爆二世問題は存在しない」と無視しました。

そのような中で被爆二世の集まり「全国被爆者青年同盟」は、政府に救済を求めるのではなく、「自分たちが生きていくための医療機関をつくろう」と全国の心ある人々に呼びかけて、多くの人々の支援で「高陽第一診療所」を72年の9月に開設しました。

そして、現在まで被爆者と被爆二世が安心して自分たちの生命と健康のよりどころにできる医療機関として活動を続けています。

子どもたちには、東電の原発事故については一片の責任もありません。しかし、私たち大人

には、たとえば国策として原発を推進した自民党政権を支持しなくとも許してきた責任はあるといえます。

脱原発・反原発の実現に向けてたたかいを大きく広く続けなければなりません。それとともに、被ばくさせられた子どもたちをはじめ多くの県民の安心と心のよりどころ、生きていくための医療機関としての診療所をつくる運動を始めます。

高陽第一診療所の存在は、被ばく地の大きな課題を教えています。大江健三郎さんは「あきらかな、実践的なものと、教育的なるものとの、『生命、生き抜くこと』をめざしての融合がみられた。」と共感を寄せたそうです。

福島診療所の建設運動に、ご賛同とご支持・ご支援をお願いします。

## 診療

被ばくから子どもたちの命と健康を守る総合医療をめざして



## 相談

「ひよっとしたら？」と不安になったとき、すぐに相談できる。



## 学習

人間本来の自然治癒力を促して、生活に健康をとりもどす



# 「人の命より金もうけ」 この社会を変える

渡辺 馨 (福島診療所建設委員会事務局長)

あの3・11大震災から1年が経ちました。福島第一原発事故による放射能被害はますます深刻になっています。

野田政権は、昨年末に「原発事故収束宣言」を行いました。避難を余儀なくされている人々の怒りをそらすために、あたかも除染すれば元の土地に戻り、住むことができるかのような幻想をあおり、「除染なくして福島の復興はない」と宣伝しています。放射性廃棄物の最終処分地も決められないままに、「除染運動」が開始され、数千万トとも予想される放射性汚染物の廃棄場所「中間貯蔵施設」を地元を設置することを求めているのです。

2月20日、山下俊一福島医大副学長は、全県民の回収率21%の県民健康調査の結果を発表しました。そこで山下副学長は、「年間100ミリシーベルト以下では明確な発がんリスクはないが、18歳以下の甲状腺検査や集団検診などの詳細調査で長期的に健康を見守っていく」と説明しています。

東電と日本政府がやっていることは、「緩やかな大量殺人」です。このまま黙っていたら、福島県民は本当に殺されます。

「放射能に未来を奪われてたまるか!」をスローガンに、3・11以降、私たちは生きるためのたたかいを開始しました。

福島の実現、日本全土が放射能に汚染され、子どもたちの未来が奪われている現実を絶対許すことはできません。子ども

たちを被ばくから守るたたかいは、福島の実現としてむき出しとなった「人の命より金もうけ」の社会を変えていくたたかいです。

命と健康を守る拠点、全国に疎開、保養を求める人々の拠り所が必要です。医療を支配者から奪い返し、反原発・反失業を貫く拠点としての診療所を、ともにつくりましょう。



## SunRise 発刊によせて

ニュースのタイトル「サンライズ」は、日本語では日の出という意味です。かならず「夜明け」はやってくるという私たちの思いを込めました。

さらに、福島診療所の設立目的である「診療」と「相談」と「学習」の3本柱の意味も込めました。また、福島診療所建設委員会ロゴに使われている3色は、水、緑、太陽をイメージしたものです。フクシマの子ども達の未来を取り戻すことは、まさに奪われたこの3色を取り戻すことそのものです。

診療所建設は大変な事業ですが、多くの方々のご協力によって必ずや実現したいと思います。ともに力を合わせていきましょう。